

チャイコフスキー: バレエ音楽「くるみ割り人形」より“花のワルツ”

ロシアの作曲家チャイコフスキー(1840~1893)のバレエ音楽「くるみ割り人形」は、クリスマス・イブの出来事を描いたもので、1892年に初演されました。

少女クララはクリスマスのプレゼントとして人形使いのドロッセルマイヤーおじさんからくるみ割り人形を贈られます。みんなが寝静まった頃、クリスマスツリーのところに置いてあるその人形を見に行くと、不思議なことに彼女の身体はどんどん小さくなり、この人形に率いられたおもちゃたちの兵隊たちが動き出します。そこにネズミの兵隊があらわれ、おもちゃの兵隊との戦争が始まります。やがてくるみ割り人形とネズミの王との一騎討ちになり、人形がピンチになったとき、クララはネズミの王にスリッパを投げつけて人形を助けると、人形は呪いがとけて元の王子の姿に戻ります。こうして王子は助けてもらったお礼に、クララを「雪の国」と「お菓子の国」へと案内するというのが

あらすじです。

チャイコフスキーはこのバレエのために素敵な音楽をたくさん作曲しましたが、なかでも「花のワルツ」が有名です。このワルツは「お菓子の国」での歓迎パーティーで、こんべい糖の精の侍女たちが華麗に踊る場面の音楽です。

曲はハーブの独奏ではじまり、ホルンが演奏するワルツの旋律が華やかにくりひろげられ、中間部では愁いにみちた旋律があらわれます。やがて最初の旋律があらわれ、華やかな響きを増すなか曲を閉じます。

1940年に作られたディズニー映画「ファンタジア」ではこの「花のワルツ」が使われていて、秋の精や、霜の精、雪結晶の精たちが音楽にあわせて踊る幻想的な映像が展開されています。

榎田てつ之扶: 交響組曲「秀吉」より“秀吉のテーマ”

榎田てつ之扶(1935年生まれ)は吹奏楽曲を数多く作曲していますが、「箏・十七絃・尺八のための白い夜」や「琴・三弦・尺八とギター・マンドリン合奏のためのシンフォニア」など、邦楽器を使った作品も作曲しており、日本の伝統音楽の響きを積極的に取り入れた作風が大きな特徴です。

今日演奏される交響組曲「秀吉」は、副題が“もうひとつの太閤記”とあるように、戦国時代に活躍した豊臣秀吉の波瀾にみちた生涯を5曲からなる壮大な音楽で描いたものです。なかでも今日演奏される第1曲の「秀吉のテーマ」は、映画のオープニングテーマを思わせる勇壮な響きにあふれた音楽です。今日は市原市立国分寺台西中学校吹奏楽部との共演で演奏されます。

久石譲: 「となりのトトロ」より“さんぽ”

作曲家の久石譲(1950年生まれ)は映画音楽を数多く作曲していますが、特に宮崎駿監督とのコンビによる音楽は、宮崎アニメになくはないものとなっています。特に1988年に公開された映画「となりのトトロ」では、「さんぽ」、「すすむたり」、「ねこバス」などたくさんの親しみやすい歌が登場し、子どもたちの大人気となって

います。

今日演奏される「さんぽ」(作詩・中川李枝子、歌・井上あずみ)は、この映画のオープニング曲として作曲されたもので、弾むようなリズムが特徴で、保育園や幼稚園で広く歌われています。

いずみたく: 手のひらを太陽に

いずみたく(1930~1992)は1950年に舞台芸術学院演劇科を卒業したあと、芥川也寸志に師事して作曲を学び、歌謡曲からCMソングなど幅広いジャンルでヒット曲を数多く作曲しました。なかでも「太陽がくれた季節」(青い三角定規)、「夜明けのうた」(岸洋子)、「見上げてごらん夜の星を」(坂本九)、「世界は二人のために」(佐良直美)などは、その時代と社会の動きを映し出す響きにあふれています。

「手のひらを太陽に」の歌詞を書いたのは、アンパンマンで知られるやなせたかし(1919~2013)で、当時彼は「前途まっ暗」と感じて

いたそうです。そのときふと手をみると「本人はこんなにしょぼりしているのに、血は元気に流れている」と、なにか励まされるような気がしてこの詩を書き、旧知のいずみたくに作曲を依頼して出来上がったのがこの「手のひらを太陽に」でした。

1961年に誕生したこの歌は、翌年NHK「みんなのうた」で宮城まり子が歌って放送され、さらに1965年には紅白歌合戦でポニージャックスが歌うと大ヒットしました。この歌は2006年に「日本の歌百選」に選ばれています。

スメタナ: 交響詩「わが祖国」より“モルダウ”

チェコの作曲家スメタナ(1824~1884)は晩年に耳が聴こえなくなったので、プラハから50キロほど離れたヤブケニツェという静かな農村に引っ越し、ここで6曲からなる連作交響詩「わが祖国」を完成しました。

この連作交響詩は、チェコの歴史、自然、民衆を音楽讃歌として描いたスメタナの代表作で、特に第2曲「モルダウ」(チェコ語でヴァルタヴァ)が有名です。曲はモルダウ河の2つの水源を暗示するフルートとクラリネットの旋律ではじまり、小さな流れが合流して大河に

なっていく様子が描かれています。曲のなかでは、河の両岸から聴こえてくる狩りの角笛や農夫たちの結婚式での踊り、急流で波がしぶきをあげて飛び散る様子などが描かれ、最後にプラハの街に入ると、堂々たる大河になった響きで曲を閉じます。

初演は1875年4月に行われ、現在では毎年スメタナの命日である5月12日に開幕する「プラハの春国際音楽祭」のオープニングコンサートで「わが祖国」全曲が演奏されています。

市原ロータリークラブ55周年記念演奏会

おらがまちのクラシックコンサート

指揮: 山下一史 ヴァイオリン: 森下幸路★ 管弦楽: 千葉交響楽団

スッパ: 喜歌劇「軽騎兵」

グリーグ: 「ペールギュント」より“朝”

エルガー: 愛の挨拶

ドビュッシー: 「小組曲」より“小舟にて”

マスネ: タイスの瞑想曲★

チャイコフスキー: バレエ音楽「くるみ割り人形」より“花のワルツ”

～休憩～

国分寺台西中学校吹奏楽部との共演

榎田てつ之扶: 交響組曲「秀吉」より“秀吉のテーマ”

みんなて歌おう

久石譲: 「となりのトトロ」より“さんぽ”
いずみたく: 手のひらを太陽に

スメタナ: 交響詩「わが祖国」より“モルダウ”

司会: 佐藤江美

令和元年 9.22 日 14:00開演 (13:30開場) 市原市市民会館大ホール

【主催】RI第2790地区第4グループ市原ロータリークラブ 千葉県 【後援】市原市 市原市教育委員会

ご挨拶



本日は、市原ロータリークラブ55周年記念演奏会「おらがまちのクラシックコンサート」にお越しくださいませ、誠にありがとうございます。市原ロータリークラブでは、日頃より「あいさつ運動」その他さまざまな活動に対し、市内小・中・高校生をはじめ地域の関係団体の皆様に多大なるご協力を頂いており、深く感謝いたしております。

この度、当クラブは、お陰様で創立55周年を迎えさせて頂きました。つきましては、千葉県と共同して、千葉交響楽団の皆様をお招きし、感謝の記念演奏会「おらがまちのクラシックコンサート」を開催する運びとなりました。

ご存知の通り千葉交響楽団は山下一史音楽監督を招聘し、心をゆさぶる演奏は音楽愛好家をひきつけてやみません。さらに、ゲスト・コンサートマスターとしてお招きした、ヴァイオリン森下幸路さんが奏でるストラディバリイの音色お楽しみ下さい。さらに近年市内の中学校では、吹奏楽部の活動が盛んなこともあり、子供たちにプロの演奏を肌で感じてもらう今後の部活動に生かしてもらえればと思い、国分寺台西中学校とのコラボレーションのプログラムも企画を致しました。

終わりに、日頃の地域皆様のご支援に深く感謝しますとともに、今後も市原ロータリークラブがなお一層の奉仕活動に精進することをお約束して55周年記念演奏会のあいさつとさせていただきます。

市原ロータリークラブ 会長 篠田美幸

出演者プロフィール

指揮 山下一史



桐朋学園大学卒業後、ベルリン芸術大学に留学。1986年ニコライ・マルコ国際指揮者コンクールで優勝。1985年12月よりカラヤンの亡くなるまでアシスタントを務める。その後、ヘルシンボリ響(スウェーデン)首席客演指揮者、九響常任指揮者、大阪音大ザ・カレッジ・オペラハウス管常任指揮者などを歴任、2008年4月同団名誉指揮者就任。2006年仙台フィル指揮者、2009年4月から2012年3月まで同団正指揮者。2011年にはシューマン・歌劇「ゲノフェーファ」日本舞台初演。その他水野修孝作曲歌劇「天守物語」を指揮するなど、オーケストラ、オペラの両面で着実な成果を上げている指揮者として注目を浴びている。2016年4月よりニューフィルハーモニーオーケストラ千葉(現・千葉交響楽団)音楽監督就任。以降、同楽団の評価を着実に高め、千葉県民より「おらがまちのオーケストラ」と親しみを込めて呼ばれるよう目指している。東京藝術大学音楽学部指揮科教授。

管弦楽 千葉交響楽団



千葉交響楽団は、千葉県唯一のプロオーケストラであり、前身であるニューフィルハーモニーオーケストラ千葉の31年間の活動を引き継ぎ、2016年10月に公益財団法人千葉交響楽団と改称した。千葉県内の音楽文化の創造を使命とし、地域に根ざした活動を基本に県内を中心に演奏活動を行っている。定期演奏会をはじめ、県民芸術劇場や各地での演奏会など、毎年およそ20回にわたるコンサートを行っている。また、次代を担う子どもたちに向けては、千葉県及び各市町村教育委員会との共催で「小中高等学校音楽鑑賞教室」を毎年およそ50校で実施しているほか、幼稚園や特別支援学校への訪問演奏や室内楽の演奏等、あわせて年間150回ほどのコンサートを行い、県民に音楽の素晴らしさを伝えている。2016年4月からは音楽監督として山下一史を招聘し、その年5月の第99回定期演奏会「山下一史音楽監督就任記念コンサート」では、熱気あふれる演奏で観客を魅了、その後、多くの県民の支持を得て、「おらがまちのオーケストラ」と親しまれるよう、着実に実績を積み重ねている。

ヴァイオリン 森下幸路



京都市生まれ。4歳よりヴァイオリンを始め、幼少を米国で過ごし、小林健次、田中千香土、江藤俊哉 アンジェラ夫妻、三善晃等の各氏に師事。桐朋学園大学を経て米国シンシナティ大学特別奨学生としてドローシー・ティレー女史に学ぶ。94年、リサイタルデビューを果たし紙面でも絶賛された。96年からリサイタルを東京と仙台でスタート、その後、京都も加わる(本年が22回目)。97年にはスペインでリサイタルを行い、2011年より北ドイツ音楽祭に毎年、13年からは台湾にも時折招かれ、そして14年にはガーク音楽祭(オーストリア)にも出演。15年にはバルカン室内管弦楽団のゲストコンサートマスター、18年にはモスクワにソリストとして招かれた。2000年まで仙台フィルハーモニーコンサートマスター。現在は大阪交響楽団首席ソロンコンサートマスターおよび浜松フィルハーモニーのコンサートマスターの任にある。CDは「La vie」「esprit」※レコード芸術誌特選盤、「彩り<Couleur>」、「タベのうた」、「夢」、「カンタービレ」、「ブエノスアイレス組曲」をリリース。2013年より大阪音楽大学特任教授。使用楽器は將軍堂(株)(H.Hiruma)より貸与のAntonio Stradivarius,1680

市原市立国分寺台西中学校吹奏楽部



私たちが市原市立国分寺台西中学校は、1年生11名、2年生14名、3年生5名の計30名で活動しています。先日行われたコンクールでは、千葉県吹奏楽コンクールB部門(小編成の部)で金賞を受賞し、本選大会に進むことができました。また、座奏の演奏だけでなく、マーチングにも挑戦しています。本日、共演させていただく交響組曲「秀吉」は、千葉県マーチングコンテストで演奏した曲です。心一つに頑張ってきたコンテストだけでなく、このような大変貴重な演奏の機会をいただき、感謝の気持ちでいっぱいです。客席で聞いていただくお客様、支えてくれる家族や先生方、そして地域の皆様に、心を込めて演奏させていただきます。

プログラム・ノート

小村 公次

スッペ: 喜歌劇「軽騎兵」序曲

オーストリアの作曲家フランツ・フォン・スッペ(1819~1895)が作曲した喜歌劇「軽騎兵」は、村に進駐した軽騎兵連隊の将校と村娘たちとの恋をめぐる物語で、1866年にウィーンで初演されました。しかし現在では全曲が舞台上で演奏されることはまれで、この序曲だけが広く演奏されています。

曲はトランペットの吹く堂々としたファンファーレで始まり、軽やかなギャロップを思わせる音楽のあと、クラリネットのカデンツァを経てジプシー風の旋律へと進みます。そしてふたたび軽やかなギャロップ主題を経て曲は次第に高潮し、力強く華やかに全曲を閉じます。

グリーグ: 「パール・ギュント」より「朝」

ノルウェーの作曲家グリーグ(1843~1907)はドイツで作曲とピアノを学んだあと、指揮者、作曲家として活躍しました。なかでもノルウェーの劇作家イブセンの詩劇「パール・ギュント」のために作曲した劇付随音楽が有名です。

この物語は、夢想家のパールが世界を放浪したあと、恋人が待つ故郷に帰り着くまでを、民話や伝説をもとにして描いたものです。グリーグは全部で27曲を作曲しましたが、なかでも今日演奏さ

れる「朝」が有名です。この曲はパールがアフリカのモロッコで迎える朝の気分をあらわしたもので、フルートが演奏するすがすがしい旋律で始まり、オーボエや弦楽器がその旋律を受け継いで豊かに展開していきます。この劇音楽では、「アノトラの踊り」や「アラビアの踊り」など、エキゾチックな雰囲気にあふれた曲が多く、それらをまとめた管弦楽組曲が広く演奏されています。

エルガー: 愛の挨拶

イギリスの作曲家エドワード・エルガー(1857~1934)は近代イギリス音楽の復興に尽くした作曲家です。なかでも行進曲「威風堂々」第1番は、中間部の有名な旋律を平原綾香が自作の日本語歌詞で歌ったことで広く知られています。

今日演奏される「愛の挨拶」は、エルガーの妻となるキャロライン・アリス・ロバーツとの婚約記念に贈った曲で、1888年に作曲されま

した。この曲はもともとヴァイオリンとピアノのために作曲されましたが、エルガーはのちにピアノ独奏曲や管弦楽曲などに編曲し、広く演奏されるようになりました。曲は3つの部分からなり、最初に登場するホ長調の美しい旋律が演奏されたあと、ト長調の甘美な旋律の中間部を経て、最初の旋律が再現され、対話するように展開されたのち、静かに曲を閉じます。

ドビュッシー: 「小組曲」より「小舟にて」

フランスの作曲家クロード・ドビュッシー(1862~1918)は、19世紀末から20世紀初頭にかけて全音階などの手法による独特の響きの音楽を作曲するようになります。こうした音楽を「印象主義音楽」といいますが、ドビュッシー本人はこの呼び方に必ずしも納得していませんでした。むしろ「牧神の午後への前奏曲」のように、象徴的な響きで物語を描くことを強く意識していたからです。

「小組曲」はもともと2人のピアニストが連弾する組曲として作曲されたもので、1889年に初演されました。当初はあまり高い評価は得ら

れませんでした。ドビュッシーの友人で作曲家アンリ・ビュッセルが管弦楽曲に編曲すると、広く演奏されるようになりました。これはビュッセルがドビュッシーの音楽の特徴を巧みに取り入れて編曲したからです。

組曲は「小舟にて」「行列」「メヌエット」「ハレエ」の4曲からなっています。今日演奏される第1曲の「小舟にて」は三部形式で展開され、フルートが舟唄のような優雅な旋律を演奏します。中間部では弦楽器が決然とした響きの旋律を演奏しますが、ふたたび最初の旋律があらわれ、波間にたどる小舟の様子を象徴的に描き出しています。

マスネ: タイスの瞑想曲★

フランスの作曲家ジュール・マスネ(1842~1912)は「マノン」や「ウェルテル」など、オペラで人気を博しました。なかでも1894年にパリのオペラ座で初演された「タイス」は、オペラそのものも有名ですが、第2幕の1場と2場の間で演奏される「タイスの瞑想曲」が大人気となり、独立した曲として演奏されるようになりました。

オペラのあらすじは、厳格な修道僧アタナエルが、ヴィーナスの巫女で快楽主義者のタイスに魅惑されながらも、彼女をキリスト教徒に改宗させ、空虚な生活から抜け出すように説得するというものです。

今日演奏されるこの曲は、アタナエルの熱情あふれる説得を聞いたタイスが、長い瞑想を経て、それまでの生活を悔い改めようとする心情の変化を音楽で描いたものです。

曲はハーブに導かれて独奏ヴァイオリンが有名な旋律を奏でます。この旋律が繰り返されたあと、曲はオーケストラとともに次第に情熱的な響きで高まり、やがて甘美な雰囲気につつまれて静かに曲を閉じます。